

やっと一息ついて

升島 努

寄る年波か、近ごろ特に無理が利かない。先週、新しい装置の開発の打ち合わせをかねて、福岡・サンフランシスコ・ロンドン・マンチェスターを1週間で往復し帰って来たところ、いまだに夕方になると眠い。先ほど、科研費の申請が終わり、もうぐったり。今年は、他大学からの講義のお誘いが多く、九州大学工学部大学院が前期に、そして、先月と今月12日の2回京都大学大学院薬学研究科で講義をする。その準備、講演の準備、支部会の準備、会議、その上、日本が不景気でもあり、日本の分析企業に肩入れする思いで企業のアドバイスの的な事もあり、余裕の無い毎日が続きます、じっくり研究などは夢のまた夢。

しかし今年は、一つ長年の夢が実現した。臨床薬学独立専攻の設置である。薬剤師でもない自分の企画力が買われたのか、どうしてか、その取りまとめの中心となり、文部省に行き始めたのは、矢田先生が学科長の頃から、その後辰巳学科長となり、その頃から、木村先生と私にまかせ切り、保健学科の大学院設置にぶつかり、薬学に理解のない学部長にも恵まれ、何年待ちを食らわされた事だろう。その度に歯ぎしりした苦い思い出ばかりがよみがえる。昨年吉永学部長の最後に至っては、来年臨床薬学が行かなければ、もう復活なしとまで言われ、今まで、先延ばしにして来たのは誰だと、木村先生と怒りました。その間に、他大学は設置が進み、一番臨床薬学の環境に恵まれている当学科は、置いて行かれました。奇しくも今年の同期生は、長崎大学、先日長崎での講演で、分かったことは、やはり同じ分析の中島先生がブランチングの中心だったそうです。同じ原爆にあった町の大学の薬学が臨床薬学を共に進め始めるとは、偶然でしょうか。

しかし、私が、この臨床薬学に託す思いは、今、いわゆる臨床に近い分野の講座の先生方が考えておられる事より、さらに、理想を追うものかも知れません。服薬指導はあくまでも通過点、本当に臨床薬学が目指して欲しいものは、医師が頼りにする、あるいは対等な医療のパートナーであり、その為には、皆さん薬剤師の知識と臨床経験は、膨大なものでなくてはならず、その前に立って、気の遠くなる思いがしています。

臨床薬学独立専攻は、この冊子の最後にも書きますように、薬物治療学大講座が新設の基幹講座で、その中には、当教室の小澤君もメンバーに予定されています（予算が通ればの事です）。この講座が、しっかりと、薬剤師の未来を築いて行ってくれなくては、広島県の薬剤師の未来は遠のくとも言えるでしょう。当地域の病院の薬剤部長先生を始め、様々な薬剤師の方々と、多面的な連携をしながら、広島の、そして、広島大学総合薬学科を卒業した、薬剤師の全ての皆さんの地位向上を目指して行ってくれることを強く願っています。たとえ、10年、20年かかろうと……。

その旗手となるべき、小澤君にエールを送り続けたく思います。皆さんも、彼に力を与えてやって下さい。

もう一人、いや二人、当教室を巣立った職員が居ます。

講師の田村敦史君、彼の近況にありますように、FDAでの経験が買われ彼は厚生省の専門官として、栄転しました。当教室は停滞を許さないルールがあります。職員を育て、その適切な位置に職員を充てることは、自分の重要な任務の一つだと思います。厚生省といえば、補佐行政と言われるほど、補佐が実権を握っている所です。補佐のすぐ下に位置した彼は、この導入ポジションの後には、有能と見られるや、補佐として動くことでしょう。すでに、日本の厚生行政を司る立場からの発言が出ていますが、真に国民の健康を守る公僕として、大所高所からの適切な施策を打ち出してくれる存在になることを、心待ちにしています。

もう一人、池田佳代さん、これも大変辛い要望が杉山先生からあり、涙をのんで、かわいい子を旅に出すことにしました。実は、臨床薬学にポストを出す代わりに、教室の助手ポストを臨床薬学専攻に供出しなくてははいけませんでした。つまり、これからは、教授、助教授、技官で当面やらなくてははいけないのです（いつか取り返そうと思ってはいますが）。助手代わりが欲しい教室としては、技官で池田さんを移動させてくれれば、杉山研のお辞めになった教務員（研究職扱い）のポジションが差し上げられるとの杉山先生の、当教室への配慮に、いろいろと悩んだあげく、受けることとしました。池田との別れは、僕の助手時代の4年生であった彼女でもあり、一番長いつきあいの断絶で、話さなくても、お互い考え方の分かる存在がなくなるわけで、とても悲しいものがありました。しかし、僕は、隣の教室に居るし、彼女も

違った視点で、研究を展開でき、より大きくなれると思っ直しています。

全員欲しがられる職員を持つことは、一つの誇りだと思っます。しかし、手も足ももがれた思っは、免れません。うれしい悲鳴、いや、寂しい悲鳴、何か複雑な思っが交錯しています。

教務員のポジションに、広大理学部から、尾島君（理学博士）が、教務員のポジションにもかかわらず、入ってくれました。彼が、薬学に慣れるまでには、まだしばらく時間がかかるでしょうが、ガッツもあり、何事にも一生懸命な姿に今後を期待しています。皆さんの応援をよろしくお願ひ致します。

田村君の後を、現在公募中です。色々な人が応募して来ています。不景気なせいか、企業の方も多く、大変悩みます。うち2人は、アメリカでも面接しました。今後の教室の展開を握る人材の一人ですし、以前のように4人体制でなく、呼吸の合う人でなくてはと思うと、なかなか決断出来ないくらい、用心深くなってしまいます。

教室は、1段ギヤが、ビデオマイクروسコープなどのビデオ分析の展開だとすると、この加速で2段ギヤに・・・、MALDI-TOF/MSという、新しいコンセプトのバイオ質量分析への展開を進めています。この質量分析は、今までの様な、どでかい機械でもなく、レーザーで試料をイオン化し、高電圧パルスで飛び上がらせたイオン化分子の検出器までの到達時間を計る簡単なものです。運動会のトラック競技よろしく、小さな分子は同じエネルギーでは早く、重い分子は遅く到達するというただこれだけの単純な原理です。この為、分子量100万ダルトンといえども、分子量が測定でき、低分子から、蛋白、核酸まで、今や、蛋白シーケンスはこのMSで解析する時代、将来は遺伝子もと言った可能性を持っています。21世紀のゲル電気泳動法かも知れません。

当面のキーワードは、「ビデオ-マス」などと、相変わらず勝手なキーワードで、教室のアイデンティティーを主張しようと思っています。生体内分子コンテンツとその動態を探りきるというのが、目標です。

そういえば、冊子末に、池田佳代さんが中心にやってくれた仕事新聞記事になったものを掲載しました。これは、池田のアイデアの勝利で、それもですが、何よりも私が喜んだのは、初めて彼女が、自分で未知な事に踏み込んでくれた事、そして、成果をつり上げたことです。長い間、これを彼女には待っていました。

人が育つという事はうれしいことだ・・・と言いつつ、ウルルンとなっている自分に、多くの矛盾した気持ちを持つ、今日この頃です。

今後も、史上最強軍団の歴史を続けて行けるでしょうか。こうして人の育つことに目を細める自分に、厳しい助言が杉山先生から飛んでいます。「先生は一体何をやりたいんだ！これからは、先生のやりたいことをもっとやったらどうですか、人を育てるなんて、後からついて来ること」と・・・。

本当にそうですね。でも、やはりうれしいんだもの・・・、そして、「では、これからは、もっとやらせて貰います！」と・・・。「これからは、我々が今後も創造する新分析のパフォーマンスを、十二分に活用して、生命現象の分子機構に焦点を当て、これを詳細に解きあかしてやろう」と意気込んでいます。

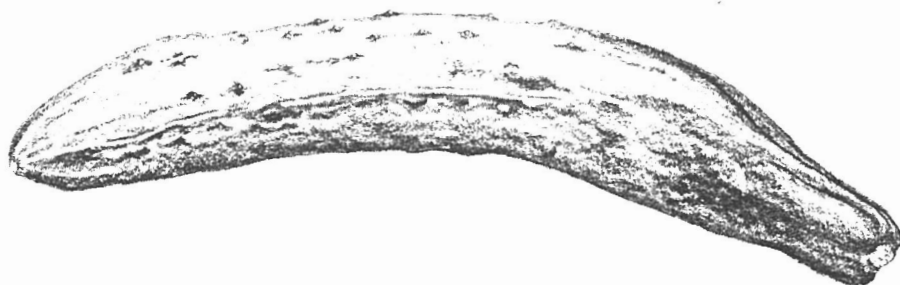
今までの10年が、走馬燈の様に脳裏によみがえります。そして、職員、卒業生の皆さんの今を見て、ようやく一息つける気持ちになっています。人事という鉛の腰のベルトもなくなり、汗を拭いている自分を感じます。

今、日本画を習い始めています。下に何十年ぶりに書いた、初めてのデッサンを載せて見ました。久しぶりに、初心に帰りました。

最後になりましたが、どこにいても、健康で、教室の願いである、ひたむきで、実りある人生を歩んで行って下さい。益々のご活躍を祈っております。

初心忘るべからず。自らに

平成10年11月 記



11/10